論文

パラアスリートをめぐる物語構造

竹内秀一

0. はじめに

2020 年の東京パラリンピック（以下、東京大会）を契機に、日本のパラスポーツ [1]をとりまく気運は高まってきた。公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団の調査報告（2017、2018）によると、大会が開催される度にテレビ放送の時間や番組数、選手を起用したテレビ CM の本数などは増えている。とくに 2013 年に東京大会の招致が決まってからの増加は著しいという。こうしたメディアによる表象の盛り上がりは、パラアスリート [2]という存在に大きく期待が寄せられていることと無縁ではない。例えば、国際パラリンピック委員会（International Paralympic Committee：IPC）によると、シンボルマークの「スリーアギトス（The three Agitos）」は「私は動く」を意味しており、困難なことがあっても諦めずに挑戦し続けるパラアスリートの姿を示している（IPC 10）[3]。その姿勢で観る者を感化し、社会を変えていくことが提言されているのである。

こうした高揚感に湧く一方で、慎重な声も聞こえてくる。実際にパラアスリートの表象に携わる河原レイカは、選手が「障害を乗り越えて…」という文脈で語られることで、障害を克服するべき「壁」と捉えられてしまうのではないかと危惧する。このような表現への違和感から、河原自身も障害者をどのように伝えるかに関して葛藤があると吐露し、パラアスリートに多くを期待し過ぎているのかもしれないと述べている（河原 65–73）。以上、メディアによる表象が隆盛するに伴って、期待と懸念も入り混じるなか、果たしてパラアスリートはどのように描かれ、語られているのだろうか。これが本稿の問題関心である。

1. 先行研究の検討と研究目的

本稿のように、メディアによる表象とスポーツが取り結ぶ社会的な関係については、

おもにメディア・スポーツ研究としてこれまで蓄積されている。まず、それら先行研究の検討を通して、研究目的とその付置を示したい。

この研究群で広く共有されていることは、メディアとスポーツが密接に絡み合いながら互いに発達してきたという点である。両者はもはや分かち難く結びついていることが強調され、あらゆる議論の前提になっている（Hargreaves；Rowe；黒田；佐伯など）[4]。例えば、佐伯年詩雄は「メディア・エージェントによってメディア商品・製品として編成され、消費・享受されるスポーツ情報」（佐伯 258）と簡潔に定義するが、その複合的な構造を丁寧に解説している。すなわち、制作側にはメディア倫理や使命感、職業文化、圧力などの諸要因が関わり、視聴読側にも好みや知識、経験、人間関係や生活課題から派生する欲望などの諸要因がある。こうした緊張関係においてメディア・スポーツは生産、流通、消費されているのである（260–263）。または D. Rowe も、2000 年までの研究動向を検討した上で、こうした特徴を「メディア・スポーツ・文化複合体（media sports cultural complex）」と概括している（Rowe 2–3）[5]。このようにメディア・スポーツという概念は、編成から消費までの各局面だけでなく、それぞれに諸要因が絡む非常に複雑なものといえる。

だからこそ、広範な概念定義をそのまま引き受けるのではなく、メディア・スポーツのどこに焦点をあてて検討するかが重要になる。数多くの研究で参照されているのは、K.M. Kinkema & J. C. Harris による分類である。二人はメディア・スポーツ研究 152 件を批判的に検討し、分析の視点として「生産過程」、「メッセージの内容」、「オーディエンス」という三領域を提案している（Kinkema & Haris 128）[6]。こうした分類に従って各領域を検討することは、メディアとスポーツ、ひいては社会全体との関係性への理解に繋がると評価されている（Wenner）。また、実際にこの分類に基づいて知見が蓄積していることも指摘されている（山本）。さらには、メディア・リテラシー理論との接近もみられる。鈴木みどりは、メディアの読解に必要となる視点を「テクストの生産・制作」、「メディア・テクスト」、「オーディ（ママ）アンス」に分けている。（鈴木 48–50）。こうした隣接する研究分野の潮流も相俟って、三領域に分けて検討するというアプローチは主流な方法の一つとなっている。本稿の問題関心に引き寄せると、とくに「メッセージの内容」に着目することが適切であると考える。そこで、次にパラアスリートが表象されるときの「メッセージの内容」に言及した先行研究を参照する。

いくつかの研究を概観すると、パラアスリートが語られるときには、様々なレトリックが用いられていることがわかった。例えば、パラリンピックの祝祭性や非日常性を強調したり、義肢装具のテクノロジーを焦点化したりすることで、全体としてパラアス

リートの存在を「後景化」していた（Schantz & Gilbert；渡［2007］；崎田）。とりわけ、パラスポーツが競技ではなくリハビリテーションの一環として捉えられていた 1990 年代後半の頃までは、その存在は不可視化されていたといえる。こうした表現は、障害者に対して見て見ぬ振りをする「儀礼的無関心」を喚起したと述べられている（渡［2007］100–102）。

障害部位が、直接に露見しない映像や写真が使われるという傾向もある。もし欠損箇所などが映り込む場合でも、男女で描き方が異なったり自国以外の選手が起用されたりと、障害のある身体は巧妙に隠されてきた（Schell & Duncan；Schantz & Gilbert；藤田（紀）［2002］；Thomas & Smith；Buysse & Borcherding）。これらは「障害の隠蔽」であり、この意味でもパラアスリートの存在は不可視化されてきたといえよう[7]。とくに女性選手では、アブノーマルで美しさからかけ離れた身体が回避され、男性選手では力強く競技に挑む姿が描かれるという対比から、古典的なジェンダー・バイアスがあることも指摘されている（藤田（紀）［2002］ 209–212）。

また、一般的なスポーツの報道と比べ、競技種目のルールや試合結果が少なく、大会参加に対する感謝や選手の日常生活といった人間味が強調される嫌いがある（Schell & Duncan；Pappous et al.）。切り抜かれる写真も競技以外のものが多く、パラアスリートの競技性は軽視されてきた。こうした表現は過度な「ドラマ化」といえ、「感動ポルノ（inspiration porn）」[8]の素材となっていることも議論されている（Grue）。

さらに、一部には古くから看取されていたものの、最近の表象で再燃しているのがパラアスリートを超人として描き出す表現である（Schell & Rodriguez；Silva & Howe）。編集によって徹底的に「超人化」されたパラアスリートは、人間の底力や可能性、克服のシンボルとして機能してきた。一方で、こうした表現は障害を個人の医学的な問題とみなし、克服すべきものという誤解を生む可能性がある。あるいは、選手の多面性や障害をめぐる諸問題を捨象して、何となく見た（理解した）振りをする「儀礼的関心」を助長することも危惧されている（渡［2010］ 240–248）。

その他にも、障害別によって表象される頻度が異なること（Schell & Duncan；Smith & Thomas）やサイボーグとして描き出されていること（Norman & Moola；David et al.）などが指摘されている。こうした議論は、パラアスリートに対する表象が隆盛するに伴って、ますます蓄積されていくだろう。

ここまでを勘案すると、先行研究では、それぞれのレトリックを問題視しながら、（健常者にとって）好ましく支配的な「メッセージの内容」がつくられていることが批判的に言及されている。これらは、パラアスリートの社会的・文化的な位置づけ、及びその

背後にある偏見や抑圧を炙り出すという点で示唆に富む。しかしながら、次のような課題も残されていると考える。すなわち、ほとんどの先行研究で対象となっていたのは、パラリンピック開催期間における新聞記事（掲載写真を含む）であり、その他のメディアによる表象が十分に検討されているとはいえない。加えて、様々なレトリックを用いて、どのような「物語」が編み上げられているのかを体系的に論じた研究も管見の限りない。以上を踏まえ、本稿では、テレビ番組を対象としたメディア・テクスト分析を通して、パラアスリートをめぐる物語とその特徴を明らかにすることを目的とする。

2. 対象の選定と研究方法

対象の選定については、次のことを重視した。すなわち、①パラリンピック開催期間も含めて長期に渡って観察できる、②新聞記事以外のメディアである、③ある程度まとまった物語が観察できるという 3 点を基準に、テレビ放送によるドキュメンタリー番組に注目した。具体的には、2008 年 3 月より NHK で放送された『スポーツ大陸』、及びその後継番組にあたる『アスリートの魂』を選んだ[9]。ドキュメンタリーというジャンルのなかでも公共放送を取り上げることで、より多くの人々に開かれた物語の把握に努めたい。なお、各放送回の基本情報は次のとおりである（表 1）。

表 1　各放送回の基本情報とパラアスリートの属性

放送年月日	タイトル	性別	障害の背景
2009年8月	プロとして生きる　車いすテニス　国枝慎吾	男性	病気による中途障害
2012年8月	勝利へのラストパス　車いすバスケットボール　香西宏昭	男性	先天性障害
2012年9月	私はもっと速くなる　車いすマラソン　土田和歌子	女性	事故による中途障害
2013年1月	迷わず挑め　アイススレッジホッケー　須藤悟	男性	事故による中途障害
2014年5月	向かい風の先へ　車いすマラソン　副島正純	男性	事故による中途障害
2015年6月	終わりなき挑戦　視覚障害者ランナー　道下美里	女性	病気による中途障害
2015年8月	生きる証のバックスピン　片腕のゴルファー　小山田雅人	男性	事故による中途障害
2015年11月	亡き友とともに戦う　車いすラグビー　池透暢	男性	事故による中途障害
2015年12月	もう一度人馬一体へ　障害者馬術　常石勝義	男性	事故による中途障害
2016年6月	私のままで跳ぶ　義足のジャンパー　中西麻耶	女性	事故による中途障害
2016年9月	義足に血が通うまで　パラリンピック走り高跳び　鈴木徹	男性	事故による中途障害
2016年9月	53歳限界を超えろ　車いす陸上　永尾嘉章	男性	病気による中途障害
2017年12月	これが私の左腕　パラバドミントン　豊田まみ子	女性	先天性障害
2018年3月	己の滑りを貫け　パラアルペンスキー　森井大輝	男性	事故による中途障害

また、実際の分析に入る前に、あらためて「物語」とは何かという点も整理しておきたい。例えば、E.M. Forster の小説論では物語を構成する要素を「ストーリー」と「プロット」に区別する。広く知られた例だと、「王様が死に、それから王妃が死んだ」はストーリーだが「王様が死に、そして悲しみのために王妃が死んだ」はプロットである。つまり、ストーリーとは時間的順序に従って出来事を語ったものであり、プロットとは出来事の因果関係を重んじたものと定義されている（Forster 129）[10]。

その上で、こうした文学理論や映画理論をテレビ番組などの映像メディアにおける物語に応用した藤田真文の研究を参照する。まず「物語には①一定の登場人物、②時間の経過と連続する出来事、③登場人物の変化が必要」（藤田［真］ 33）と整理されている。加えて、物語の進行（統辞構造）や登場人物の関係（範列構造）にも一定のパターンがあること、物語の時間軸とそのズラし方（錯時法）、語り手の立場、メディア特性など様々な約束事があると述べる（26–139）。つまり、物語には一定の構造がみられるということである。本稿では、これを物語構造と称して、議論を進める。

それでは、パラアスリートが語られるときに特有の物語構造とは何か。先述のとおり、この問題について直接的に論じたものは見当たらない。そこで差し当たり、スポーツの物語（またはアスリートの物語）に関する先行研究を参照することで、本稿の目指すべき方向性をさらに探っていく。まず認められるのは、スポーツと物語には、ある種の親和性があるという点である[11]。例えば、内田隆三は「スポーツする主体の健康、健全性、規律、鍛錬、克己、英雄的成功などにかんする物語やディスクールは再版され、商品としても消費されている」（内田 38）と指摘する。このように、スポーツにおける諸価値は往々にして物語のかたちを通して伝播するという側面がある。松田恵示もまた、スポーツにおける一つ一つの行為を目的／手段の因果関係のなかで時間軸上に配置したものを「物語としてのスポーツ」と呼び、とくに近代社会で奨励されてきたと述べている（松田 84–89）。所謂「大きな物語」[12]が失墜して以降、スポーツの物語は、人々に信じるべき筋書きを提供してきたのである。例えば、日本国内では運動部活動と人間形成が安易に結びつけられていることなどは、それを端的に示しているだろう。さらに、より構造的な観点では、阿部潔がスポーツの物語にみられる文法について、次のように述べている。少し長いが引用する。

> 競技での優勝や好成績の樹立といった栄光を勝ち得たアスリートやチームが、その後、何らかの理由で深刻な不振やスランプに見舞われる。しかし、絶望的な状況のなかでも決して諦めることなく、人知れず地道な努力を続けていく。そして遂に

不振と失意のどん底から這い上がり、見事に再起を果たす。［中略］ここで注目すべきことは、再起が必ずしも勝利という栄光に結びつく必要はないという点である。もちろん、挫折からの再起が華々しい勝利となれば、視る側は感動するだろう。しかし、たとえ再起が敗北となろうとも、栄光→挫折→努力→再起という一連の『物語』は、視る側の感動を引き起こすに十分である（阿部 101）。

この研究は、女子マラソンのドキュメンタリー番組を対象としたものではあるが、よりマクロな視点から表象を捉えようとする姿勢や枠組みは、本稿においても示唆的である。このように、意味のまとまりとその転換に注目するアプローチは、物語構造を検討しようとするときに有益な視座だと考える。そこで、ひとまず「栄光→挫折→努力→再起」という文法が、パラアスリートの物語においても認められるのかを作業仮説とする。

分析の手続きについては、映像の構成単位に着目する方法を参照した。スポーツニュース番組など、本稿の対象と比較的近いものを扱った研究でも用いられることが多いためである。同分析に詳しい水島久光は、映像を①カット／ショット（映像構成の最小単位、単一のフレーミングからなる持続したひと続きの映像）、②シーン（連続した時空間ないし意味的連関のなかで構築されたカットのまとまり）、③シークエンス（複数のシーンの結合からなる再構成された比較的大きな意味のまとまり）に大別する（水島 42）。あらためて、意味のまとまりが問題となる本稿においては、シークエンス及びシーンが重要になってくる。そのため、まずはシークエンス単位で分析することで、物語の大まかな流れを把握する。その上で、とくに重要な意味をもつと考えられる場面や個別に考察を要する箇所については、シーン単位まで解像度を上げて分析を行うことにする。なお、分析のワークシートは以下のとおりである（表 2）。

表２　分析のワークシート（例）

時間	シークエンス	シーン	カット	キャプション	ナレーターの語り	主人公の語り	他の人物の語り
3:18	選手の紹介（栄光含む）	競技種目や器具の説明	練習		……		
			本人のインタビュー			……	
			資料（試合VTR）		……		
		栄光の瞬間	過去の写真・映像（大会）	連続優勝	……		
			ライバル選手のインタビュー				……
			過去の写真・映像（大会）		……		
			本人のインタビュー			……	
		選手の卓越性	筋力トレーニング		……		
			練習			……	

3. 基本となる物語構造

ここからは、分析の結果と考察について述べていく。まずは、冒頭のダイジェストを除き、次のような共通の物語構造が認められた(図1)。物語は、〈選手の紹介（栄光含む)〉から始まっていた。このシークエンスでは、これまでの栄光に焦点をあてつつも、競技種目の解説や器具の説明、栄光を勝ち得た選手の卓越性などが紹介される。視聴者に対して、これから始まる物語の主人公に関する大まかな説明がなされている。次いで、〈スポーツへの社会化〉が看取された。ここでは、選手がそれぞれの種目へ継続的に参加するようになったバックグラウンドなどが語られている。このシークエンスは、作業仮説にはない意味のまとまりであることから、後ほど詳細に検討する。その後に続く〈努力〉と〈挫折〉のシークエンスは、放送回によって順不同ではあるが、物語のなかでも中心的な位置を占めている競技上の課題、そこへむけた挑戦と努力、報われない結果などが語られる。また、物語によっては〈挫折〉から次なる課題が設定され、再び〈努力〉へと接続されるループ状の構造も窺えた。そして結末は、全体として〈再起〉の物語として回収されていく。ここでも放送回によっては、華々しく勝利を収めて物語が閉じるものばかりではない。課題を解決していく上で何かしらの「きっかけ」を得たという帰結で幕引きとなることも多かった。物語の終盤においても、なお挑戦を続ける姿が強調されることで、再び〈努力〉へと水路づけられていくという構造である。このことから、最も大枠の意味にだけ注目すれば、パラアスリート（またはアスリート全般）とは決して満たされることのない存在であり、永遠に努力を続けるループ内に置かれているのかもしれない。以上を勘案すると、パラアスリートが語られるときの基本となる物語構造は、「選手の紹介（栄光含む）→スポーツへの社会化→努力／挫折→再起（→努力)」となり、スポーツの物語にみられる文法とまったく同じ構造という訳ではなかった。

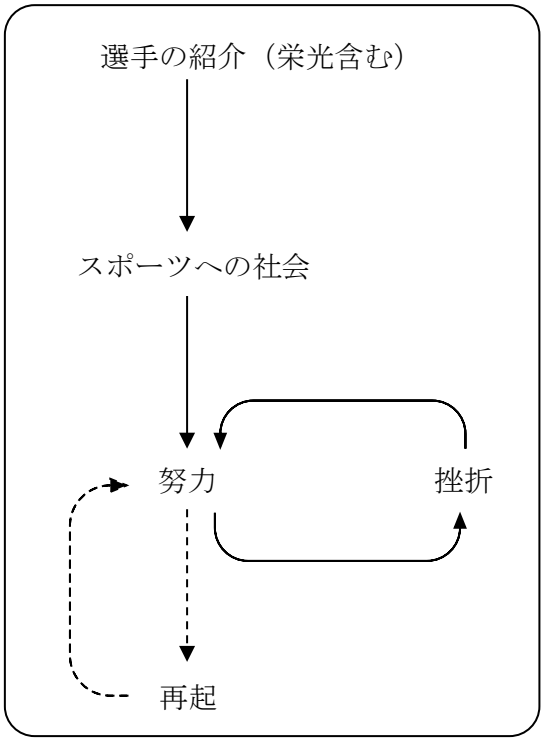

図１　パラアスリートの物語構造
（シークエンス単位）

4. 挫折の位相

以降は、パラアスリートの物語に特徴的だと推察されるものに関して、さらにシーン単位での分析も交えながら考察を深める。とはいえ、何れの物語においてもシークエンス毎に収まるシーンは、それぞれ類似する内容である以上、ほとんど帰納的に定まってくる（表 3）。

表 3　パラアスリートの物語構造（シーン単位）

シークエンス	シーン
選手の紹介（栄光含む）	栄光の瞬間
	競技種目や器具の説明
	選手の卓越性
スポーツへの社会化	障害による挫折
	エージェントとの出会い
	競技との出会い
努力	競技上の課題
	課題への挑戦（＝練習）
挫折	大会参加
	不本意な結果
	次の課題
再起	成功体験
	エージェントの介入
	努力の継続

まずは〈スポーツへの社会化〉についてである。「社会化（Socialization）」とは、ある社会集団における規範や価値観、行動様式などを身につけることを指す概念である。その上で、スポーツへの社会化とは「スポーツ文化を個人が内面化していく過程、個人がいかにしてスポーツを実践するようになるのか、それに影響を及ぼす要因は何かに注目したもの」（藤田（紀）［2013］ 19）である。本稿が作業仮説として参照した文法にはなかったが、選手がスポーツへ参入していく背景がメディアで扱われることは、さほど珍しいことではない。しかしながら、当該シークエンスをさらにシーン単位で検討すると、ほとんどの場合で「障害による挫折」、「競技との出会い」、「エージェントとの出会い」という特徴的な 3 つのシーンから成ることが明らかとなった。なかでも、全ての主人公が「障害による挫折」を必ず味わっていたことは特筆すべきだろう。当該シーンは、障害を負った事故当時の写真や再現イメージなどを用いながら描かれている。また、障害の背景にかかわらず、選手へのインタビューからも障害に対する葛藤や戸惑いが示される。

（友だちとの野球で）代走がもう凄え足の速いやつだったときは、「うるせえよ、いいじゃねえかよ」とかって言いながらも、まぁズルはズルだなーみたいな。何だろう、引け目というか負い目というか、何かそれもまたちょっと違うんすけど。まぁそういうのは感じてたのは事実ですよね。（香西の語り／括弧は筆者による追記）

できることがどんどん無くなっていって、もう日々に喜びを見出せなかったので。だからそんな私がまぁ家族のだったり、社会のお荷物なんじゃないかなと思ってました。（道下の語り）

もう本当、絶望しかないですね。戸惑いというよりも、あまりにも自分の環境が変わり過ぎてしまって。できなくなってしまったことが多過ぎて、もうどうして良いかがわからない状態でしたね、当時は。自分はどうやって生きていけば良いんだろうっていう将来に対しての不安が襲いかかってきたというか。（森井の語り）

さらに掘り下げたいのは、挫折の位相についてである。「障害による挫折」は必ず描かれてはいるが、物語全体を貫くのは〈挫折〉のシークエンスにおける不振や敗北などスポーツでの「不本意な結果」である。そのため、障害者というよりは選手としての波瀾万丈が描き抜かれていた。こうして「障害による挫折」は、競技上の挫折というより大きなフレームに回収されることで次第に目立たなくなる。そして、物語の終盤では、もはや何による挫折なのかは曖昧になった上で、選手としての〈再起〉が同時に障害者としての立ち直りとも重ねられる構造になっていた。全体的にスポーツの文脈に回収しながら、何となく障害者が困難を克服したというメッセージを伝える物語は、先行研究にみた「儀礼的関心」を彷彿とさせる。物語として体系的に描かれることは、不可視化されてきたパラアスリートの姿を視聴者へわかりやすく届ける一方で、「障害を乗り越えて…」という言説に厚みをもたせている可能性があるだろう。

また、「障害による挫折」から主人公を救うのが他でもない「エージェントとの出会い」である。鈴木へのインタビューは、こうした重要な他者との関係性を端的に示している。

パラの方がよりお世話になった人が多いと思うんですよね。ケガもしているし事故もしているし、はい。病気もあるし。で、僕なんか道具を使っているので義足を作ってくれる方がいてくれたりとか、はい。オリンピアンよりは逆に迷惑をかけているというか、そういう方も多いと思うので。それぐらいの思いが詰まっているんじゃないですかね。（鈴木の語り）

とりわけ障害者の〈スポーツへの社会化〉では、家族や理学療法士などエージェントとの相互作用が深く関連する（藤田（紀）［2013］；吉田［2014］；吉田［2016］）ことからも、物語において重要な登場人物であることが窺える。注目したいのは、少なくとも鈴木のようにエージェントとの関係性を相対的に重く受けとめ、パラアスリートとはそういう者たちであると内面化している主人公がいることである。エージェントの存在は、健常／障害にかかわらないはずである。ところが、パラアスリートをめぐる物語では「障害による挫折」の延長線上で現れることで、立ち直るきっかけを与えてくれた救世主のような意味づけとなっている場合が多い。または、当該種目へ誘ってくれた先達や指導者の他にも、義肢装具士やガイドランナーといった競技に欠かせない存在としてエージェントが登場することも少なくなかった。例えば、視覚障害者マラソンなどは、その競技特性上、伴走者がいなければ練習もままならない。ナレーターの次のような語りからは、そのときの様子が窺える。

予定していた伴走者が怪我をしたため練習がキャンセルになっていました。伴走者がいなければ走りたくても走れない現実に直面し、気持ちが落ち込んでいました。（ナレーターの語り）

何れにしても、パラアスリートが語られるときには、他者との親密な関わりが不可欠なものとして織り込まれている。こうしたシーンは、誰かの助けに依存する二流の選手という印象を、図らずも強化することに繋がってしまうのではないだろうか。

以上、パラアスリートをめぐる物語には必ず「障害による挫折」という不運な出来事と、そこから主人公を救済する「エージェントとの出会い」という一連の因果関係が認められた。そして、他者の存在が欠かせないという競技特性も相俟って、過度にヒューマンドラマとして消費されてしまう側面があると示唆される。こうした物語構造が、どうしようもなく「ドラマ化」をよび起こしていると考えられるのである。

5.「健常な身体」の挿入

他方、必ずしも一定のシークエンスには収まらず、物語によって異なるはたらきを示すシーンもみられた。これらは放送回ごとに結びつくシークエンスが違い、それぞれの意味のまとまりを補強したり、主人公を多面的に描き出したりするものとして機能していた。

取り上げたいのは、物語の所々で「健常な身体」が挿入されていた点についてである。ここでいう健常な身体とは、差し当たり障害のある身体との対置で、障害のない身体を指すことを付言しておきたい。その上で、具体的には〈選手の紹介〉において、それは看取された。このシークエンスには、主人公の卓越性について触れるシーンが含まれている。とくに肉体的な卓越性が語られるときには、それを裏付けるためにハイスピード・カメラによる動作解析や脳科学といった所謂「科学」による検証のシーンが入る。このとき比較対象として用いられるのが「健常な身体」である。例えば、小山田の物語では、次のような解説が入っていた。

> ハンディキャップをものともせず健常者顔負けのプレーを繰り広げました。［中略］右腕が無くても、なぜ健常者にも負けない飛距離を出せるのか。その秘密を探るため、スポーツ医学が専門のＳ教授に動作解析を依頼しました。（ナレーターの語り）

中西の物語においても、ナレーターによる同じような語りが認められる。とくに中西の場合は、健常選手との比較分析の映像も挿し込まれていた。こうした編集の末に、健常者を超える卓越性がより強調されていたのである。

> 中西選手の走りの美しさをデータによる分析で検証しました。陸上選手の体の動きを研究しているＩ教授です。注目したのは足の接地時間。足が地面に着いてから離れるまでの時間です。健常者トップクラスの選手と、踏み切り前の６歩を比較しました。［中略］健常者を上回るバランスの良さで走っていることが分かりました。（ナレーターの語り）

こうした「健常な身体」による裏付けが挿入されることで、パラアスリートの障害のある身体は、劣位に置かれるどころかそれを上回る存在として描き出される。あるいは、寧ろ「科学」による検証を挟まないと理解できないような怪物的な存在として位置づけられている可能性すら窺えるのである。これらは「超人化」のレトリックに関わる内容

であり、パラアスリートは「できる」という価値の最果てにいる超人として演出されているといえる。この場合、「健常な身体」は、選手の卓越性を理解可能なものにし、且つその凄さを証明するための尺度として機能していると考えられる。

または、〈努力〉のシークエンスにおいても「健常な身体」の挿入がみられた。〈努力〉では、おもに競技上の課題への挑戦と努力が描かれる。そのなかで、主人公が課題解決の糸口とするのが健常選手のプレーであり、こうした文脈と結びつくとき「健常な身体」はまた異なるはたらきをもつ。例えば、国枝や豊田は自らの競技力向上を図るなかで、それぞれの指導者から五輪選手や健常者のトップ選手を参考にするよう勧められていた。

> 取り入れたのは、健常者のトップ選手の動き。これまでの車いすテニスにとらわれない新しい技術を身につけていった。［中略］憧れたのは、世界王者 F。サーブを打つと同時に車いすを全力で漕ぐ。瞬時に異なる動きを続ける難しい技術だ。（ナレーターの語り）

> 狙いはスマッシュのパワーアップにあった。Y コーチが理想とするお手本がリオ（オリンピック）の銅メダリストだ。高く上げた左腕を大きく引く。その反動で、カラダを回転させる。［中略］一方の豊田選手は、体の回転が足りない。右手だけの、所謂手打ちだ。（ナレーターの語り／括弧は筆者による追記）

これらの背景には、パラスポーツが長らく身体的な機能回復訓練として捉えられてきたことが関わっている。パラスポーツは、競技というよりリハビリテーションの一環であった歴史が長い。次第に競技性が増してスポーツとして捉えられていったとはいえ、技術的・戦略的な蓄積がまだ十分とはいい難い状況なのかもしれない。あるいは、同じ競技種目であっても選手ごとに残存する能力が異なる故に、プレーの仕方も個別性が高いことが推察される。つまり、競技力向上の手掛かりとなる材料が限られていたこともあり、健常者の動きやプレーを輸入する運びとなったのではないだろうか。このとき、「健常な身体」は理想的身体の象徴として機能している。換言すれば、それは「勝てる」身体の代表に他ならない。

このようにパラアスリートをめぐる物語において、「健常な身体」は結びつくシークエンスによって異なる機能をもつことが示唆された。すなわち、主人公の卓越性を証明するための尺度であり、また追い求める理想的身体の象徴でもあった。何れにしても、競技性に焦点があたるとき、選手自身においても視聴者に対しても、「健常な身体」が一つの基準として想定されていることは間違いないだろう。

6. 物語にみられるジェンダー・バイアス

主人公の性別によっても、いくつか違いが認められた。まずは、放送された件数自体が、（パラアスリートを扱った放送回そのものが多くないが、それでも）男性選手と比べて少ないことが指摘できる。女性選手がメディアで扱われる機会は相対的に少なく、スポーツにおいて不可視化され排除される傾向にあることは、これまでも議論されてきた（DePauw；熊安；Bruce）。たとえ取り上げられたとしても、「フィギュア・スケート、新体操、シンクロナイズド・スイミングのような女らしさを基盤にした競技種目」（飯田 73）に限られ、スポーツの男性中心主義を追随する状況にある。本稿でみられた放送回の偏りは、パラアスリートにおいても女性選手が周縁化される嫌いがあることをあらためて示す結果といえる。障害者であり女性であるが故に、メディアで扱われる機会が極端に少なくなっている点は、重層的な差別を受けている可能性を示唆するものである。

物語構造における具体的な違いとしては、次のような点が析出された。まず、〈努力〉における「競技上の課題」についてである。男性選手の場合、「左右の腕力でバランスをとる」や「下半身の強化」などの肉体的な課題、または「義足を使いこなす」といった技術的な課題が問題となっていた。映像としても、筋力トレーニングに励む姿などが中心に描かれている。対して、女性選手は「自分を追い込む」や「諦めの早さを克服」など精神的な課題に焦点があてられていた。肉体的な課題に焦点があたる場合でも、「美しい走り」といった形容がなされていた。女性選手では、力強さや逞しさなどの男性的なイメージを想起させる表現が回避されていたと考えられる。なお、「障害部位の隠蔽」については、動きのなかで欠損箇所や義肢が瞬間的に映り込むことはあっても、意図的に隠すような描写は、性別問わずみられなかった。

また、主人公が既婚である場合、「家族との絆」が独立したシーンとしてみられた。例えば、道下の物語では〈選手の紹介〉のほとんどが、料理を作る描写をはじめ夫との日常生活の紹介になっている。土田の物語でも、子どもと一緒に食事を作る描写や夫からの応援が「皆で頑張ろうって言ってくれた」と字幕付きで語られるなど、家族との関わりが明確に示されていた。注目したいのは、その後に続く場面である。

まぁ自分の子どもなんで、心配は心配なんですけど、今はやっぱりトレーニングをしに来ているので。もちろん命が優先でまぁそこは第一なんですけど、まぁでも今はトレーニングをしに来ているので、そういう意味では切り替えて、はい。やってます。（土田の語り）

これは、競技の強化合宿中に子どもの体調が急変したという連絡を受け取り、そのときの心境を語ったものである。シークエンスとしては〈努力〉のなかで起きた出来事であり、競技と子育ての両立に悩む様子も描かれるが、土田は合宿の続行を決める。そして、合宿を終えると同時に「アスリートの顔から母親の顔に戻っていました」というナレーターの語りがあった。「戻る」という表現は、あくまで基本となる顔は母親であることを暗示している。ところが、母親としての想いや葛藤は、物語の終盤で自己ベストを更新できたという「成功体験」において、選手としての課題とともに解消されていく。やはり〈再起〉では最終的にスポーツの文脈へと回収する仕掛けが窺えるが、寧ろここでは、物語のなかに伝統的な性役割が編み込まれている点に注目したい。こうした表現は、「スポーツと無関係な側面（non-sport-related aspects）」や「異性愛の強制／あるべき女らしさ（compulsory heterosexuality / appropriate femininity）」と呼ばれており、「これらのルールは、スポーツにおける女性を理解するために、当たり前とされてきた枠組みを反映した『初期設定』と考えられる。これらは絶対的なものではなく永遠に続く保証もないが、強力な枠組みとして確立されており、多くの批判にもかかわらず変化させることは難しい」（Bruce 28）と指摘されている[13]。女性のパラアスリートが語られるときにも、こうしたフレームワークが深く根をおろしていることが明らかとなった。加えて、性役割を強化しているという点では、ほとんどの女性選手が夫や（男性）指導者から「もう一回走らせてあげたい」、「勝負させてあげたい」、「勝たせてあげたかった」という言葉を掛けられていた。語りから透けてみえる位置関係は、女性選手を常に客体へと追いやり、業績をあげても男性からの助けによるものとして描き出してしまう。結果として、家父長制に未だ巻き込まれているイメージ（Orlansky；Iida）が創られている可能性がある。受動的というニュアンスには、同時に障害者であることも関わっていそうだが、男性選手が描かれるときには認められなかったことから、ジェンダー・バイアスの一つであると考えられるだろう。

最後に、障害者であることが呼び水となったある出来事について若干の考察を試みたい。対象となるのは、中西の物語である。この物語は「毎月一回、必ずネイルサロンに通うというこの女性」という説明と、彩られた指先のクローズアップから始まり、何よりもまず女性であることが強く印象づけられる。森田浩之は、こうした行為をスポーツ

の「弁解行為（apologetic behavior）」と捉える。すなわち、「一流になった女性アスリートは『男らしさ』と親和性をもってしまうため、女性に期待される社会的役割と衝突する。そのためフィールド内で発揮する『男らしさ』に対する『弁解』を、フィールドの外で伝統的な『女らしさ』を示すことによって行なっている」（森田 115）と述べる。そして、具体例として女性らしい外見を強調する、セクシーな服を選ぶ、筋肉を目立たせないようにすることなどを挙げている。今回のテクストからは、中西自身が「弁解」を意図したか否かまでは読み取れないが、少なくとも自らを飾り、人前に出ることに抵抗の少ない人物であることは窺える。こうした描写が重ねられた上で「障害を売り物にするな」というキャプションとともに触れられた、ある出来事に注目したい[14]。

> 活動資金を集めようと発売したセミヌードカレンダー。鍛え抜かれた身体と、身体の一部になっている義足を見て欲しいという思いもありました。しかし、日本のネットなどで壮絶な批判が浴びせられます。アスリートとしての自分の存在を否定されたと感じました。（ナレーターの語り）

批判の的となった背景では、女性、障害者、選手という異なる存在様式が複雑に絡み合っていたと考えられる。おそらくセミヌードカレンダーは多少なりとも性的な表現を含むことから、「女性として」消費されることは想像に難くない。一方、中西自身は「アスリートとして」その身体と義足を見て欲しかった、競技を続ける活動資金を応援して欲しかった旨が、ナレーターの語りを通して表明されている。ところが、結局は「障害者として」自らの障害を売り物にしたことが批判されるという事態になっていた。これらの齟齬は、さらにネットという言説空間において、本人の意図を離れ、一人歩きをするうちに生じたものと推察される。この出来事は、物語構造として捉え直すと〈スポーツへの社会化〉に収まっており、批判を機に競技から離れていた中西が、エージェントの助けでスポーツの世界へと再び包摂されていく様子が描かれている。その他の物語と同じように、最終的にはスポーツの文脈に回収されて事なきを得るが、こうした「障害による挫折」は、長らく見られる性として位置づけられてきた女性が故の内容であるとも考えられる。さらに重要なことは、如何なる行為も、どうしようもなく障害者によるものとして捉えられてしまう点である。自らの身体をある種の見せ物として晒すことは、健常／障害、または男性／女性にかかわらない行為である。しかしながら、当該活動は「アスリートとして」ではなく「女性として」でもなく、「障害者として」のみ理解されている。ここに、中西が巻き込まれた歪んだ社会構造をみることができるのでないだ

ろうか。

以上、パラアスリートをめぐる物語に散見されるジェンダー・バイアスを考察してきた。そのいくつかは、同時代における障害の社会的・文化的な位置づけ、伝統的な性役割、「障害の隠蔽」に対して自ら晒すという行為（抵抗？）など、さらに考慮する点を多く含んでいる。ここで指摘できるのは、女性のパラアスリートはそれほどまでに重層的で錯綜した抑圧を受けている可能性があること、且つ物語としては、それらがみえにくい構造になっていたことである。

7. 結論と今後の課題

本稿は、テレビ番組を対象としたメディア・テクスト分析を通して、パラアスリートをめぐる物語とその特徴を明らかにしてきた。そのなかで、得られた示唆は次のとおりである。まず、パラアスリートを語るときの基本となる物語構造は、「選手の紹介（栄光含む）→スポーツへの社会化→努力／挫折→再起（→努力）」となり、スポーツの物語にみられる文法とまったく同じ構造ではないことが明らかとなった。その上で、パラアスリートに特有のものとして次の点が析出された。まずは、物語には必ず「障害による挫折」という不運な出来事と、そこから主人公を救済する「エージェントとの出会い」という一連の因果関係が編み込まれていたことである。こうした構造は、どうしても「ドラマ化」と結びつき易く、ヒューマンドラマとして消費されてしまう側面があると考えられる。さらには、物語の所々で「健常な身体」が織り込まれていたことである。ただし、物語のどこで挿入されるかによってその意味は異なり、ときにパラアスリートの卓越性を証明するための尺度であり、ときに追い求める理想的身体の象徴でもあった。このように、選手自身においても視聴者に対しても、「健常な身体」が一つの基準として想定されていることが明らかとなった。他方で、いくつかのジェンダー・バイアスも散見された。男性選手はより男性らしく、女性選手はより女性らしく映るような〈努力〉の方向づけがなされていた。また、「家族との絆」に象徴されるような伝統的な性役割や、あるべき女性像が深く根をおろしていた。あるいは、一人のパラアスリートとしての行為であっても、障害者による行為としてのみ捉えられてしまう歪んだ社会構造も看取された。しかし、これらの特徴も、物語として構造的に編み上げられるなかでみえにくくなっていた。

今後の課題としては、次の２点を挙げる。一つは、慎重に選定したとはいえ、それで

も限られた対象による考察であることは間違いない。引き続き、メディアによる表象に目配せをして、分析対象を拡げていきたい。もう一つは、物語において「誰が」「何を」語っているのかをさらに検討する必要もあるだろう。ここまで触れてきたように、物語における各シークエンスやシーン（＝意味のまとまり）は映像だけでなく、主人公やナレーターなどの語りからも同定されている。こうした語りに着目すると、厳密には主人公が自らについて「語る」場合と、ナレーターや他の登場人物によって「語られる」場合があることに気づく。今後は、この違いに関しても考察を深めていきたい。

本稿は 2018 年度第 2 回の「NHK 番組アーカイブス学術利用トライアル」の研究助成を受けた成果の一つである。ここで、あらためて深く御礼申し上げる。

註

* 本稿は、日本スポーツとジェンダー学会第 17 回大会で発表した「女性の障害者スポーツ選手をめぐる言説――マスメディアにみる物語構造の分析から」、及び日本体育学会第 69 回大会で発表した「障害者スポーツをめぐる物語構造――スポーツドキュメンタリー番組の分析から」をもとに、大幅に加筆修正したものである。

[1] 類語には「障害者スポーツ」なども挙げられるが、本稿では、関連用語や概念を整理した佐藤（2018）に準じて、パラリンピックの採用競技に限らず広く障害者スポーツを総称する「パラスポーツ」という語を用いる。ただし、引用の場合は原文表記とする。

[2] 日本パラスポーツ協会（Japan Para-Sports Association: JPSA）の定義に則り、本稿では、パラリンピック出場の有無にかかわらず障害のあるアスリート全般を示す「パラアスリート」という語を用いる。ただし、引用の場合は原文表記とする。

[3] 原文：The three Agitos (from the Latin meaning “I move”) encircling a central point symbolise motion, emphasise the role of the Paralympic Movement in bringing athletes together from all corners of the world to compete. The symbol also emphasises the fact that Paralympic athletes are constantly inspiring and exciting the world with their performances: always moving for- ward and never giving up.

[4] 僅かながら、スポーツのメディア的な側面（＝何かを運ぶ）を指して、概念定義をした研究もある。広瀬一郎によると、メディア・スポーツは「単にマス＝メディアによって取り上げられ報道されるスポーツというだけでなく、スポーツ自体がメディアとして機能する事である。［中略］様々な情報が現代スポーツを通じて社会に提供される、つまり、スポーツをメディア（媒

介）としてコミュニケーションが成立している」（広瀬 202–203）と述べる。

[5] 原文：We are all, willing or otherwise, daily confronted by the ‘media sports cultural complex’. This concept embraces all the media and sports organizations, processes, personnel, services, products and texts which combine in the creation of the broad and dynamic field of contemporary sports culture.

[6] 原文：It is evident that the majority of work on sport and the mass media can be subsumed under three major categories: the production of mediated sport texts, the messages or content of mediated sport texts, and audience interaction with mediated sport texts.

[7] この背景には、西欧社会ではスポーツが「健康」、「若さ」、「性的魅力」などと強く結びついており、「病気」、「不自由」、「切断」といったイメージを想起させる障害の表象があまり好まれないことも関わっている（Schantz & Gilbert 84）。

[8] 自らも障害者であったコメディアン兼ジャーナリストのステラ・ジェーン・ヤング（Stella Jane Young, 1982–2014）が、人々に感動を与えるために障害者が消費されることを指した造語。

[9] 分析においては「NHK 番組アーカイブス学術利用トライアル」による研究協力を得た。採択の時期により 2018 年 7 月までの放送回（再放送を除く全 340 件）が候補となり、そのうちパラアスリートが題材となった 14 件（各回およそ 45 分）を分析対象とした。

[10] 原文：We have defined a story as a narrative of events arranged in their time-sequence. A plot is also narrative of events, the emphasis falling on causality. “The king died, and then the queen died,” is a story, “The king died, and then the queen died of grief” is a plot.

[11] この背景については、井上俊による次の指摘が示唆に富む。井上は、「文学理論の領域では、ロラン・バルトやジュリア・クリステヴァといった人たちによって、完結的な『作品』に対立するものとして『テクスト』の概念が強調されてきましたが、社会科学の領域でも、行為や文化をテクストとしてとらえようという観点が 1970 年代以降、いろいろな形であらわれてきます」（井上 37）と述べる。その上で、「たとえばスポーツのイデオロギー分析などのなかには、暗黙にせよテクスト論的な視点をもったものがあったわけですが、これを明示的、意識的に、さらに広い領域に適用していくなら、スポーツというテクストを物語論的な視点から分析していくアプローチ」（37）がひらかれていくと予感する。こうした学術的な潮流のなかで、文化としてのスポーツやそこでの行為をテクストとして捉える視座が展開されていった。

[12] J.F.リオタールが提唱したもので、人々の行為や思考を水路づける言説や神話といったイデオロギーのことである。マルクス主義やキリスト教的道徳観などが、その一例である。「大きな物語」のもとでは、ある価値観が統一的に信じられることで共同体がつくられ社会設計がなされる。リオタールは、こうした人々を巻き込む筋書きが機能していた 1970 年代までをモダン（近代）とし、有効性を失った 1980 年代後半以降をポストモダンと呼んでいる。より詳しく

は、リオタール（1979＝邦訳 1986）を参照のこと。

[13] 原文：We can think of these Rules as representing ‘default settings’ that reflect taken-for-granted frameworks for making sense of women in sport. Although these Rules are not absolute nor guaranteed to continue forever, they have established themselves as powerful frameworks that have proven difficult to shift, despite extensive critique.

[14] この出来事に関する記述も含むルポルタージュ『ラスト・ワン』も出版されている。より詳しくは、金子（2014）を参照のこと。

引用文献リスト

阿部潔「スポーツ・ドキュメンタリーのポリティクス——女子マラソン番組における『感動の物語』と『凄さの衝撃』」、伊藤守編『メディア文化の権力作用』、せりか書房、2002 年、98–126 頁。

飯田貴子「メディアスポーツとフェミニズム」、橋本純一編『現代スポーツメディア論』、世界思想社、2002 年、71–90 頁。

井上俊「スポーツ社会学の可能性」、『スポーツ社会学研究』1、1993 年、35–39 頁。

内田隆三「現代スポーツの社会性」、井上俊ら編『スポーツ文化を学ぶ人のために』、世界思想社、1999 年、22–40 頁。

金子達仁『ラスト・ワン』、日本実業出版社、2014 年。

河原レイカ「『障害者』をどう伝えるか——2020 年東京パラリンピック開催に寄せて」、『障害学研究』15、2019 年、65–73 頁。

熊安貴美江「新聞の関連記事見出しとジェンダー——『月刊切り抜き体育・スポーツ』1990～1999 年より」、『大阪女子大学人間関係学科人間関係論集』17、2000 年、145–163 頁。

黒田勇『メディアスポーツへの招待』、ミネルヴァ書房、2012 年。

公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団『障害者スポーツの進行と強化に関する調査研究報告書』、2017 年、13–29 頁。

———『障害者スポーツの進行と強化に関する調査研究』、2018 年、10–16 頁。

佐伯年詩雄『現代スポーツを読む—スポーツ考現学の試み』、世界思想社、2006 年。

崎田嘉寛「東京パラリンピック大会（1964）に関するテレビ放送——NHK でテレビ放送された映像に着目して」、『スポーツ史研究』28、2016 年、71–83 頁。

佐藤紀子「我が国における『アダプテッド・スポーツ』の定義と障害者スポーツをめぐ

る言葉」、『日本大学医学部紀要』46、2018 年、1–16 頁。
鈴木みどり「映像をめぐるメディア・リテラシー」、『マス・コミュニケーション研究』46、1995 年、44–58 頁。
広瀬一郎『メディアスポーツ』、読売新聞社、1997 年。
藤田紀昭「障害者スポーツとメディア」、橋本純一編『現代スポーツメディア論』、世界思想社、2002 年、197–217 頁。
———『障害者スポーツの環境と可能性』、創文企画、2013 年。
藤田真文『ギフト、再配達——テレビ・テクスト分析入門』、せりか書房、2006 年。
松田恵示『交叉する身体と遊び——あいまいさの文化社会学』、世界思想社、2001 年。
水島久光「『笑い』と『涙』の生産と流通——情報バラエティの感情経済学」、藤田真文・岡井崇之編『プロセスが見えるメディア分析入門——コンテンツから日常を問い直す』、世界思想社、2009 年、37–65 頁。
森田浩之『メディアスポーツ解体——〈見えない権力〉をあぶり出す』、日本放送出版協会、2009 年。
山本教人「国内外におけるメディア・スポーツ研究の動向と今後の課題」、『九州体育・スポーツ学研究』14(1)、2000 年、1–10 頁。
吉田毅「中途身体障害者のスポーツへの社会化に寄与する他者に関する社会学的研究——骨肉腫を克服した元車椅子バスケットボール選手の語りから」、『体育学研究』59、2014 年、855–867 頁。
———「中途身体障害者はどのような他者によってスポーツを継続するようになるのか——複線的スポーツキャリアを形成した元カーレーサーのライフヒストリー」、『スポーツ社会学研究』24(2)、2016 年、53–68 頁。
リオタール, J, F.『ポスト・モダンの条件——知・社会・言語ゲーム』、小林康夫訳、水声社、1986 年（Lyotard, J, F. *La condition postmoderne*, Les éditions de Minuit, 1979.）
渡正「障害者スポーツによる儀礼的関心の構築——1970 年代の『運動』とパラリンピックの表象」、『千葉大学日本文化論叢』8、2007 年、106–93 頁。
———「パラリンピックの表象実践と儀礼的関心」、橋本純一編『スポーツ観戦学：熱狂のステージの構造と意味』、世界思想社、2010 年、230–251 頁。

Bruce, T. “Sportswomen in the Media: An Analysis of International Trends in Olympic and Everyday Coverage”, *Journal of Sport and Gender Studies*, vol. 15, 2017, pp. 24–39.
Buysse, J, A, M. & Borcheding, B. “Framing Gender and Disability: A Cross-Cultural Analysis

of Photographs From the 2008 Paralympic Games”, *International Journal of Sport Communication*, vol. 3, 2010, pp. 308–321.

David, M. et al.“Repurposing the (Super) Crip: Media Representations of Disability at the Rio 2016 Paralympic Games”, *Communication and Sport*, vol. 9(1), 2019, pp. 3–32.

DePauw, K, P.“The (in) visibility of disability: cultural contexts and ‘sporting bodies’”, *Quest*, vol. 49, 1997, pp. 416–430.

Forster, E, M. *Aspects of The Novel*, Edward Arnold, 1927（フォースター, E, M. 『小説の諸相』, 中村康司訳, みすず書房, 1994 年）.

Grue, J.“The problem with inspiration porn/ a tentative definition and a provisional critique”, *Disability & Society*, vol. 31(6), 2016, pp. 838–849.

Hargreaves, J. *Sport, Power and Culture: A Social and Historical Analysis of Popular Sports in Britain*, Polity Press, 1986（ハーグリーヴス, J. 『スポーツ・権力・文化——英国民衆スポーツの歴史社会学』, 佐伯聰夫・阿部生雄訳, 不昧堂出版, 1993 年）.

Iida, T.“Japanese case study: The gender difference highlighted in coverage of foreign athletes”, in Bruce, T.et al. (eds), *Sportswomen at the Olympics: A global content analysis of newspaper coverage*, Sense Publishers, 2010, pp. 225–236.

Kinkema, K, M. & Harris, J, C.“Sport and the Mass Media”, *Exercise and Sport Science Reviews,* vol. 20, 1992, pp. 127–159.

Norman, M, E. & Moola, F.“‘Bladerunner of boundary runner’?: Oscar Pistorius, cyborg transgressions and strategies of containment”, *Sport in Society*, vol. 14(9), 2011, pp. 1265–79.

Orlansky, R.“Moving forward: Sports and gender in modern Japan”, *Graduate Journal of Asia-Pacific Studies,* vol. 5(1), 2007, pp. 71–83.

Pappous, A, S. et al.“From Sydney to Beijing: The Evolution of the Photographic Coverage of Paralympics Games in Five European Countries”, *Sport in Society*, vol. 14(3), 2011, pp. 345–354.

Rowe, D. *Sport, Culture and the Media*, Open University Press, 2004.

Schantz, O, J. & Gilbert, K.“An Ideal Misconstrued: Newspaper Coverage of the Atlanta Paralympic Games in France and Germany”, *Sociology of Sport Journal*, vol. 18, 2001, pp. 69–94.

Schell, L, A. & Duncan, M, C.“A content analysis of CBS’s coverage of the 1996 Paralympic Games”, *Adapted Physical Activity Quarterly,* vol. 16, 1999, pp. 27–47.

Schell, L, A. & Rodriguez, S.“Subverting bodies/ ambivalent representations: Media analysis of Paralympian Hope Lewellen”, *Sociology of Sport Journal*, vol. 18, 2001, pp. 127–135.

Silva, C, F. & Howe, P, D.“The (In)validity of Supercrip Representation of Paralympian Athletes”, *Sport & Social Issues*, vol. 36(2), 2012, pp. 174–194.

Smith, A. & Thomas, N.“The 'inclusion' of elite athletes with disabilities in the 2002 Manchester Commonwealth Games: An exploratory analysis of British newspaper coverage”, *Sport, Education and Society*, vol. 10(1), 2005, pp. 49–67.

Thomas, N. & Smith, A.“Preoccupied with able-bodiedness? An analysis of the British media coverage of the 2000 Paralympic Games”, *Adapted Physical Activity Quarterly*, vol. 20(2), 2003, pp. 166–181.

Wenner, L, A. *MediaSport*, Routledge, 1998.